

## 第2分科会

### 特別支援学校における進路指導・職業教育の充実に資するための支援ツール(案)の提案

～ 全国調査をふまえて ～

#### 〈シンポジスト〉

- 神崎 好喜（横浜市立盲特別支援学校主幹教諭）  
秋山 秀二（千葉県立千葉特別支援学校教諭）  
小嶋 忠史（宮崎県立赤江まつばら支援学校教諭）  
美濃 亮（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課専門官）  
原田 公人（国立特別支援教育総合研究所教育支援部総括研究員）  
柳澤 亜希子（国立特別支援教育総合研究所企画部研究員）

#### 〈司 会〉

- 千田 耕基（国立特別支援教育総合研究所教育支援部上席総括研究員）

第2分科会では、司会の千田上席総括研究員より本分科会の趣旨説明、研究代表者である原田総括研究員より専門研究A「障害のある子どもへの進路指導・職業教育の充実に関する研究」の趣旨及び概要について説明がなされた。（要項 p 27 参照）

#### 〈柳澤研究員による全国調査結果の報告〉

平成20年度に実施した全国特別支援学校を対象に実施したアンケート調査について報告がなされた。本調査の結果を踏まえて、1) 進路指導・職業教育の専門性の継承の難しさ、2) 移行支援会議の位置づけと管理職の参画の必要性、3) 進路指導・職業教育に関する教育課程の改善と指導体制の整備の必要性、4) すべての教職員が参照、使用できる進路指導・職業教育の手引きの必要性、5) 障害のある子どもの地域社会に根ざした生活や社会参加をめざした連携の必要性と、今後、検討及び改善すべき課題について言及された。（要項 p 28－29 参照）

#### 〈原田総括研究員による支援ツール（案）の提案〉

全国調査の結果を踏まえて提案した支援ツール（案）の捉え方とその3つの観点について説明がなされた。また、各観点にそって、研究協力者の勤務校で活用されている支援ツールの具体例（連携マップ、学部別進路指導計画、個別移行支援計画、保護者用進路ガイダンス等）が紹介された。

（要項 p 30－31 参照）

#### 〈神崎氏による話題提供〉

神崎氏からは、盲特別支援学校の専攻科（理療関係学科）において、あはき師（あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師）養成に携わる立場から、視覚障害者にとってのあはきの意義、あはき師の就業の実態・困難点、横浜市立盲特別支援学校専攻科理療科・保健理療科の概要、セールスポイント、外部との連携・協力について報告がなされ、盲特別支援学校における職業教育としてのあはき師養成及び就労支援の今後の方策について提案がなされた。（要項 p 32－33 参照）

#### 〈秋山氏による話題提供〉

秋山氏は、知的障害特別支援学校で進路指導・職業教育に携わる立場から、文部科学省委託事業「職業自立を推進するための実践研究事業」における取組の実際、職業教育として「進路・教科」の授業の新設とその取組、障害者就労基盤整備事業の活用と千葉県障害者職業能力開発プロモート事業との連携、

作業学習の取組の実際、現場実習実施にあたっての工夫とその考え方、関係機関との連携、個別の移行支援計画記入の視点について報告がなされ、それらを踏まえた実践の成果と課題について言及された。

(要項 p 34－35 参照)

#### 〈小嶋氏による話題提供〉

小嶋氏からは、幼稚部から高等部まで設置されている病弱特別支援学校で進路指導に携わる立場から、障害種に対応した指導内容、進路指導の捉え方、各学部の学習指導案の紹介、進路指導担当者に必要な資質・能力やその果たすべき役割、地域との連携の在り方について紹介がなされた。また、上記を踏まえて、自校の実践の成果と課題について言及された。

(要項 p 36－ p 37 参照)

#### 〈美濃専門官による話題提供〉

美濃専門官からは、小学部・中学部・高等部段階を通じた組織的・系統的なキャリア教育、各学校段階におけるキャリア教育の目標、キャリア教育の定義と学校全体での意識の共有の必要性、各学校段階に応じて子どもたちにどのような力をつけさせるべきか、各学校において育成したい能力・態度の設定、体験的な学習活動の充実、将来の進路を具体的に考える機会を設けること、特別支援学校高等部の生徒が取り組んでいる資格や検定の例、職業教育をめぐる今後の国の動向（中央教育審議会 キャリア教育・職業教育特別部会）等について説明がなされた。

#### 〈参加者との質疑応答〉

参加者：これからキャリア教育を推進していく上で、キャリア教育、職業教育、労働教育等の言葉の整理が必要だと考えているのでご指導いただきたい。また、支援ツールには教員が使うものと子どもが使うものがあり、子ども自身がセルフコーチングできるものがあればご教示いただきたい。

原田総括研究員：言葉の定義は、所内でも議論しているところである。これまで各特別支援学校で使用されてきた言葉を大事にしたいと考えている。支援ツール（案）については、まず直接、先生に使っていただくものを提案している。また、先生よりも子どもが使ってみてはどうかという実践例もある。来年度以降の研究では支援ツール（案）を検証し、プログラムという形で提案したいと考えている。

参加者：千葉県立千葉特別支援学校では、作業学習で給食補助をやっているとのことだが、自校では作業時間が週2時間しかないため先方の都合とあわない等の問題がある。そうした問題をどう解決しているのか。

秋山氏：様々な問題があったが、交渉を重ねながら2学期になって実現した。作業学習は、本校の場合は毎日行っている。

#### 〈全体総括〉

司会の千田上席総括研究員より、本年度で終了となる本研究の報告書は5月末頃に発表される予定であること、本研究はスタートアップ研究であり、来年度以降にはテーマは変わるが継続して研究を進めていくこと、したがって、支援ツール（案）を現場の先生方に活用していただき、今後も特別支援学校の先生方の協力をいただきながら支援プログラムに発展させていく予定であることが述べられた。